支援機器等教材活用実践事例フォーマット

実践年度・タイトル		令和（元）年度 自分でiPadを操作しながら写真を見て、目的地に行こう～Keynoteを使って～
授業について	教科名等	□国語　□社会　□算数/数学　□理科　□生活　□音楽　□図画工作/美術　□家庭/技術・家庭　□体育/保健体育 □特別の教科　道徳　□外国語/外国語活動　□総合的な学習の時間　□特別活動　□自立活動　■各教科等を合わせた指導 □その他の教科　□その他（　　　　　）
	単元・題材名	校内宝さがし
	授業の目標	・写真（二次元）を見て、場所や物（三次元）を理解し、自分で目的地に行けることの楽しさを知る。 ・iPadの操作に慣れ、自分で情報を得ようとする。
	学力の3要素	□「知識及び技能」　■「思考力・判断力・表現力等」　■「主体的に学習に取り組む態度」
学習集団と子供の実態	学校・学部・学年・人数	□通常の学級　□通級による指導　□特別支援学級　■特別支援学校 □就学前　■小学生　□中学生　□高校生以降 □特定されない （4・5・6）年　（　３　）人
	対象の障害	□視覚障害　□聴覚障害　■知的障害　□肢体不自由　□病弱・身体虚弱　□言語障害　□自閉症 □情緒障害　□LD（学習障害）　□ADHD（注意欠陥/多動性障害）　□その他
	子供の困難さ	■見ること　■聞くこと　■話すこと　■読むこと　■書くこと　□動くこと　■コミュニケーションをすること　■気持ちを表現すること ■落ち着くこと・集中すること　■概念（時間、大きさ等）を理解すること　■学習（計算、推論等）すること　□その他 ・音声言語での指示理解は曖昧である。離れている物は見ることができず、手元のものも注視して見ることは難しい。 ・手順などを示すときは1枚ずつ写真やイラスト等を注意喚起して見せると分かることもある。興奮すると自制がきかず、いつも活動している場所以外では、教師と活動することが多い。
支援機器等教材の活用について	活用の意図	Aコミュニケーション支援（□A1意思伝達支援　□A2遠隔コミュニケーション支援） B活動支援（■B1情報入手支援　■B2機器操作支援　□B3時間支援） C学習支援（□C1教科学習支援　□C2認知発達支援　□C3社会生活支援） D実態把握支援（□D1実態把握支援） ・手元で写真を見る・分からないときに簡単に写真を見直すということを繰り返し行うことで、二次元の物を見て、三次元の物が分かる。 ・iPadの操作に慣れることで、今後、いろいろなアプリを自分で使うための素地を作る。
	使用した支援機器等教材の名称と画像	支援機器：iPad アプリケーション：Keynote
授業展開	授業展開・支援の手立て	生活単元学習で、クラス児童数を1人と2人に分かれて「校内宝探し」を行った。 「Keynote」を操作して、校内の指定された場所に行き、そこにある封筒を取って、教室に戻ってくる。指定する場所は3カ所程度とする。 ①「Keynote」を操作して封筒（中に文字が入っている）が置いてある場所（校内のいろいろな写真と名前が載っている）を確認する。 ②「Keynote」を操作して、そこまでの道順を示す写真を見ながら、指定された場所に行き、封筒を取る。 ③全ての封筒を取り終えたら、教室に戻って来る。 ④封筒に入っている文字を並べて単語を作り、宝としてお菓子をもらう。 ※「Keynote」のスライドには、封筒が置いてある場所の道順を示す写真と封筒が置いてある場所の写真と場所名が載っている。最後は、教室の写真と「きょうしつにもどる」という言葉が載っている。 ※スライド1枚につき、写真1枚を基本とする。
効果・評価	子供の様子や変容および授業の評価	授業を楽しみにするようになり、笑顔で目的地を探していた。自分からiPadの画面に触れ、次のスライドを見て、目的地に向かうようになった。写真を見ながら目的地に行けるようになることが増えた。また、道順が違った場合は、教師が間違ったところまでスライドを戻すと、写真を見て、正しく目的地に行くことができるようになった。目的地に行くと、自分で封筒を見つけて、取って来ることができるようになった。その他の学習においても、自分で「Keynote」を操作する場面が見られるようになった。 アプリの立ち上げなどは教師が行っているが、引き続き指導を行うことで自分でできるようになり、有効なアプリを活用していけるようになるのではないかと考える。